The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「南イタリア」とamoral familism
Author(s)	井本, 恭子
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2017, 51, p. 57-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71413
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「南イタリア」と *amoral familism*

井 本　恭 子

キーワード：「南イタリア」／ amoral familism ／つながり・の・つながり

1．はじめに

イタリアには1950年代から60年代にかけて、まるで近代化を阻むような「風土」があるかのように名指され、意味づけられた地理的範疇がある。最もよく知られているのは、バジリカータの寒村を調査したアメリカの政治学者Banfield [1] によって'*amoral familism*'「道徳意識を欠いた家族主義」（*The Moral Basis of a Backward Society*, 1958）の地とされた'*Mezzogiorno*'「南部」であろう。そうした地理的範疇を「創造」し、「後進性」の名のもとに周辺化する、そのこと自体が問題であるとしても、筆者の関心はそこにはない［Schneider 1998］。また、'*amoral familism*'については、すでに多くの研究者が俎上に載せているので［Marselli 1963；Wichers 1964；Pizzorno 1966；Colombis 1997；Kertzer 2007；Ferragina 2009］、「後進性」のエートスの妥当性を問うことでもない。[2]

では、本稿の主眼はどこにあるのか。当時、Banfieldが近代化の精神によって徹底的に斥けようとしたもの、特殊性におしこめようとしたものを、前述の'*amoral familism*'によって説明される生活態度や行動様式の再検討を通じて、彼が見ようとしなかったものを明らかにすること、当該地域の人びとの日常的世界を支えていたつながりのダイナミクスとそれを支える「論理」に迫ることにある。

「共同性」の参照点として主題化されると、「共同体」は変化する社会の特性を欠いた、閉鎖的、均質、同一性という消極的かつ否定的な側面をもった

「村落共同体」として想像されたり、昨今はエコなライフスタイルや持続可能な社会のモデルとして積極的かつ肯定的な側面をもった「田舎」あるいは「田園」として「再発見」されたりする。本稿は、そうした参照点に現れる「共同体」に特有な「共同性」を、実体化する試みではない。生活世界を取り巻く状況の劇的な変化にさらされた人びとが、日常的な諸関係をやりくりしながら、暮しを維持しようとする、そのやりかたに注目したい。1950年代から60年代の南イタリアに注目する理由は、そこにある。つまり、大衆消費社会の形成と同時に、経済成長を支えるための農村の近代化と地域工業の開発政策を柱とした国土の全域的な解体と再編が強行され、「南部」の農村生活が文化的危機に陥った時期だからである。<外>からの圧倒的な力にローカルなものが解体されつつ再編されるプロセスに、「共同性」がむきだしになる、それは破壊のなかで維持される「何か」なのではないか。筆者は、生活維持に欠かせない日常的なつながりの微調整による、変化への適応プロセスに、それを捉える手がかりがあると考えている。本稿は、そのとばくちに過ぎないが、まずは、社会の変革を目指したBanfieldが捉え損ねたものを明らかにすることから始めたい。

2．Banfieldとモンテグラーノ

Banfieldは、なぜ、モンテグラーノ（仮称）[3] を調査対象にしたのだろうか。まずは、その背景を見ておこう。彼がイタリアにやって来たのは、1954年、「経済の奇蹟」と言われる成長期に入ったときである。しかし「南部」の農村は「奇蹟」とは無縁、極度の「貧困と後進性」を代表するヨーロッパ地域のひとつだと見なされていた。近代化は「豊かさ」への合理的かつ必然のプロセスであるという前提に立てば、「貧困と後進性」（前近代的な状態にとどまっている）は、その歩みが阻害された状態であり、その要因と改善策を探るには、「南部」の農村は最適な場所、まさに「フロンティア」であった。アソシエーションこそが、経済的進歩に欠かせないと確信していたBanfield

にとっては、停滞しているモンテグラーノは社会組織の相を見るための「フロンティア」だったのである。彼にとっての自明の前提は、9カ月の調査を終えてまとめあげた *The Moral Basis of a Backward Society*（1958）の冒頭によく表れている。少し長くなるが引用しておこう。

> 世界の多くの人びとは、家族あるいは部族よりも大きな共同体に一度も属することなく生きて死んでゆく。ヨーロッパとアメリカを除けば、政治的アソシエーションや協同組織をつくるような一致した行動は、稀であり新しいものである。
>
> そうしたアソシエーションの欠如は、世界の大部分における経済発展の道を制限する重要な要因である。協同組織を創り維持することができなければ、近代的な経済は持ちえない。はっきり言えば、生活水準があがるほど、組織の必要性はますます高くなる。組織を維持する力がないことは、政治的な進歩も阻んでしまう。［略］経済的な目的にかなった、効果的なアソシエーション形成をもたらす要素は、政治的なアソシエーション形成にも同様に見られる。
>
> トクヴィルは、「地上で最も民主的な国は、共通の欲求を全員で追い求める術を高度なまでに完成させ、その新たな知識を数多くの目的に応用してきた国である」と述べた。
>
> われわれは技術的な状況と自然資源が整えば、どこにでも経済的、政治的アソシエーションはすぐに生まれるものだと思っている。技術が多くの人びとの活動を一致させ、より大きな利益を可能にするところまでくれば、人的資本と組織術はどこからか現れ、組織が発生し成長するだろうと。このような安易な思い込みはよくある。
>
> こうした前提は、文化の決定的な重要性を見落としているので、誤りである。人びとはたいへん異なるやりかたで暮し思考しており、その様式のいくつかは、組織の厳格なシステムが要求するものとは、まったく相いれないからである。たとえば、手をのばして手近なヤシの実を取っ

て、それで満足するような場所では、強い組織をつくりあげることはできなかった。誰も命令や指示に従わないような場所にも、やはりできなかった［Banfield 1958：7-8］。

Banfieldは経済発展＝近代化の遅れの問題をアソシエーションの欠如とそれを規定する文化（決定因子）によって記述しようとしていることが、前述の冒頭から読みとれるだろう。近代化とアソシエーションは不可分の関係にあるという持論の検証の地として、「南部」の小さな村モンテグラーノはそこにあったのである。もう少し丁寧に言えば、家族や一族の枠の外で、共通の利益を追求するために協同したり、長期的に進歩を目指してともに行動したりしない人びとの態度、すなわち彼らのエートスが進歩の阻害要因であること、それを確かめるための格好の土地が、経済的に停滞しているモンテグラーノだったのである。

このような見通しをもっていたBanfieldの目に、モンテグラーノの人びとの暮しはどのように映ったのだろうか。彼が見いだした村の社会生活を特徴づけているものを見てみよう。

３．*'amoral familism'*「道徳意識を欠いた家族主義」

Banfieldによれば、モンテグラーノには、25人の裕福な男たちがトランプや談義の場にするサークル以外は、アメリカで見慣れていたアソシエーションがまったくなかった。村でただひとつのアソシエーションらしきサークルのメンバーたちは、村の問題に関わろうとか、主体的に何かを計画しようとか、誰ひとりとして思わないと述べている［Banfield 1958：16］。アソシエーションのほぼ完全な欠如状態、これが彼のモンテグラーノの最初の印象であった。当時、Banfieldはアソシエーションのネットワークが網の目のように張り巡らされたユタ州のセントジョージで調査を終えたばかりだったので、モンテグラーノの対照的な状況は、かなり衝撃的だったと思われる。彼

の目には、「社交」や「つきあい」のようなパーソナルな関係やそうした関係の一時的な集積の「場」は、組織化されない「寄り集まり」としか映らなかったのかもしれない。

アソシエーションの未発達を文化的に説明するために、Banfieldは人びとの生活態度や行動の調査から、非常に単純な仮説を導き出す。モンテグラーノの人びとには、「家族の物質的かつ短期的な利益を最大限にせよ、他の誰もが同じように行動すると思え」という行動の指針があり、それは'*amoral familism*'「道徳意識を欠いた家族主義」というエートスに起因しているというものである［Banfield 1958：85］。そしてこのエートスは、高い死亡率、階層間の関係性（たとえば'signori（シニョーリ）'と呼ばれる大土地所有者と折半小作人にみられる従属関係）、拡大家族の欠如が相まって形成されたものだとする［Banfield.：10］。これは仮説だとしながらも、'*amoral familism*'は「南部」（ルカーニャ、アブルッツォ州、カラブリア州、カンパーニャ州の内陸部、カターニャ周辺の沿岸部、メッシーナ、パレルモ、トラーパニ）にも適応可能なアソシエーション欠如社会のモデルにもなると考えていた［Banfield 1958：40］。つまり、利他的な行動や家族（個人が組み込まれた）を越えた団体組織の結成に自発的に向わないのは、誰もがその時々の家族の利益を目当てにするからで、それはモンテグラーノの風土によるものだが、「南部」の固有性でもあると言っているのである。もちろん、すべての人びとがそのような行動をすると言う意味ではなく、そのような指針を持っていると言いたいのだ。

では、アソシエーションの障害となる'*amoral familism*'の表れとは具体的にどのようなものなのか。Banfieldが出しているいくつかの例で確認しておきたい［Banfield 1958：85-104］。彼が「見ようとしたものを見た」、それは何かを知る材料にはなるだろう。

・慈善活動がほとんどみられない。
・生活改善や向上のための自発的な組織がない。

・規則的な組織は＜外＞から介入する教会と国家の二つしかない。
・投票行動には長期的な（将来の）利益や全体の利益よりも、家族に短期的利益をもたらすほうを優先させる態度が見られる。
・重要な地位にある者（役人、知識人、医師、弁護士など）は使命感に欠け、自己の利益のために力を使う傾向にある。

どれも印象記述に見えるのだが、ここでBanfieldの前提を思い出してほしい。彼はアソシエーションは経済発展に欠かせないものであるが、それを阻むような文化的因子、「組織の厳格なシステムが要求するものとは、まったく相いれない」ものを見ようとしているのである。モンテグラーノに見られる協同の習慣の欠如、自発的な連帯の欠如、公共心の欠如は、すべて‘*amoral familism*’に因るもので、まさにアソシエーションが求めないもの、否認すべきものであった。ここに発展／停滞、アソシエーション／家族、全体の利益／個別の利益、利他的／利己的といった二項対立の図式が透けて見えるし、近代化の文脈では後者は前者によって、否定されるか消極的に評価されることも容易に読み取ることができる。ではこの枠を外すと何が見えてくるのか。それを明らかにするためには、アソシエーションを単に受容されるべきものではなく、連帯のひとつのありかた（組織化された集団）と見なし、モンテグラーノの人びとの日常生活に即した関係のありかたを探らねばならない。筆者にはBanfieldの記述から断片を拾い集めるしかないが、少なくとも彼が「そのように見えてしまったもの」、「見ようとしなかったもの」から浮かびあがらせることはできるだろう。手がかりは「物質的かつ短期的な利益」と‘*amoral*’である。

４．「見えなかった」つながり・の・つながり

Banfieldには「物質的かつ短期的な利益」の追求にしか見えなかった行動や態度を、人びとの生活維持を中心にしたさまざまな結びつきから捉えなお

してみる。彼のアソシエーションの発想の盲点を突くと言ってもよいだろう。そのためには、村にはどんな人が住んでいるのか、どうやって家計を維持しているのか、誰とどんな関係を結んでいるのか、といった生活の実相を知る必要がある。ここではBanfieldが記述した「階層間の関係」を参照したい。その前に'*amoral familism*'を説明するのに最適とされている村の描写を抜き出しておく。少し回り道になるが、「信頼社会」や「市民コミュニティ」に対置され、家族の絆の強い相互不信の社会の代表とされる南イタリアの村のイメージをここで紹介しておくのも、無駄ではないだろう[4)]［Putnam 1993；Fukuyama 1995］。

> モンテグラーノの考え方では、他者に与えられる利益はすべて、必ず自身の家族の損失となる。だから、他者が負う義務以上のものを他者に与えるような慈善という贅沢などはできない。処罰もしかりである。このような世界では、家族という小さな輪の外にいるすべての人は、競争相手になるかもしれないし、敵になる可能性もある。家族でない人に対して不信を抱くのも無理はない。親は、ほかの家族が彼の家族の成功を妬んだり恐れたりして、妨害しようとすることを知っている。ゆえに、彼は他の家族を恐れなければならず、自分とその家族に損害を与える力を持たせぬように、いつでも身構えておかねばならない［Banfield：115-116］。

さて、本題に戻ろう。Banfieldの記述［1958：69-84］をもとに、まずは村の人びとを素描してみる。「土地に直接かかわる（耕作する）か否か」で、「農民」[5)]（人口の3分の2）、「職人・商人」、「上流層」の3つの集合に分けられる。加えて村に居住しているが、別のルールを持っている「ジプシー」がいる。彼らは夏の聖人祭のときに立つ市（村外から台所用品、布地など日用品を積んだトラックがやってくる）で家畜を商うだけで、村の人びとの「物質的かつ短期的な利益」には一切かかわらない。市場交換のみのつきあいである。

「農民」は小作人（折半小作）と自営農民に分かれ、前者は道路建設など単発の仕事もし、わずかながら土地やロバも所有している。後者は農地に住み、収入の半分以上は耕作や地代から得ている。「職人・商人」には、仕立屋、パン屋、大工、鍛冶屋、肉屋、雑貨屋、映画館主などが含まれ、見習いも従業員もいないが、わずかばかりの土地は所有している。「上流層」は、'*galantuomo*'（ガラントゥオーモ）「高貴な御人」と呼ばれる、18の農地を所有する大地主（不在地主）と'*signori*'（シニョーリ）「紳士」と呼ばれる、地主、医者、弁護士、薬剤師、公務員（村外出身者が半数）から成る。分限者ではあるが、ほかの集合を支配下に置いているわけではない。'*signori*'に並ぶほどの財を成した自営農民や商人、息子に資格や学位を取らせて専門職に就かせようとする農民もいるが、家の社会的評価はあがっても位置は変らない。

次に、Banfieldの言う「実質的かつ短期的な利益」の態度が、大きくかかわってくる村の人びとの関係を見てみよう。先回りして、Banfieldが「態度」だと考えたものの正体を明かせば、すべての集合に適応される（＜ウチ＞の範囲となる）二者関係の「きまり」である。その「きまり」とは、「自分に必要なものを相手から引き出せば、これ以上は求めない、それで終り」という「完全充足」である。

どの集合であろうと、人びとはパーソナルな（具体的な）「対面的」関係で動いており、とりわけ「農民」にとっては、こうした二者関係は複合的な生活のリソース（現金・現物収入、自家消費用の食べものを供給する土地、燃料や家畜の飼料を供給する森）のひとつであった。そうなると、人びとの行動の指針は、最終目標に達するには、誰と関係しなければならないのか、どの関係をたどるのがベストなのか、という点になるだろう。このような村の人びとの関係を表してみると図1のようになる。人びとがその構成メンバーとなる集合間、家族間を結ぶ ⟷ は「きまり」に基づいた関係を示している。「きまり」が適応されない「ジプシー」とは市場交換のみというのは示唆的である。

Banfieldの記述にある二者関係の話をまとめてみる［Banfield 1958：96］。

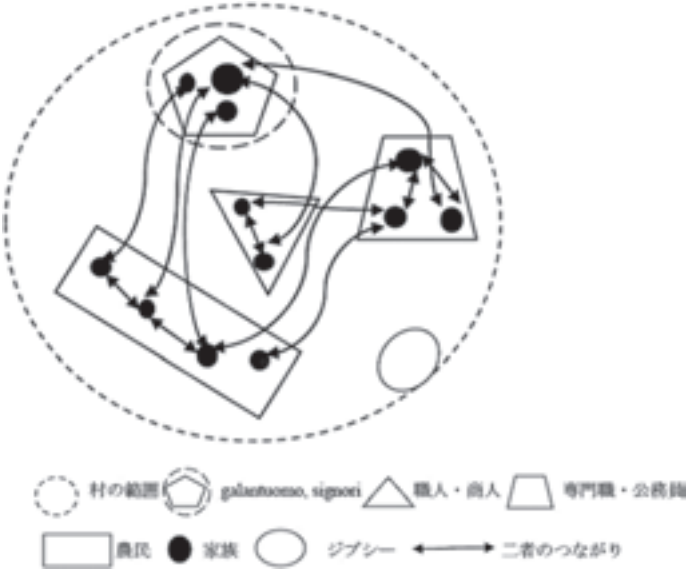

図1　村のつながり

徴税人が自家消費用のブドウを収穫するのに人手がいるので、数人の農民に頼みに行った。報酬は一日の労働で2キロのブドウを支払うと言うと、彼らはその仕事を請け負ってくれた。断ったからと言って税金が高くなるわけではない。それなら徴税人と親しくするのが得だと考えたからである。Banfieldには、双方が具体的な状況にあわせて自身の利益を引き出して終りの関係に見えたようであるが、報酬を受け取る＝「完全充足」＝終わりではないのである。農民たちが「親しくするのが得だ」と言うのは、頼んだ徴税人は自分たちが必要なときに頼みごとを受けなければならないことがわかっているからである。農民たちはまだ求めることができるから「得」なのである。頼むことは常に頼まれることを含む、これがBanfieldの言う「物質的かつ短期的な利益」の正体である。

Banfieldには、自分に必要なものを相手から引き出せば、相手が必要なものを自分が与える義務が生じるという二者間の交換であること、最終的な目

的は必要なものを手に入れることで、「もうこれ以上は求めない」という「きまり」が、短期的な損得勘定や公共心の欠如の「態度」に見えたと考えられる。小さな関係の不連続が見えなかったと言ってもよいだろう。

前述のような二者関係は前近代の「遺制」に見える。しかし興味深いことに、「遅れてきた」近代化とともにモンテグラーノには、彼らが馴染んでいる二者関係を使いながら、「完全充足」しつつ「これ以上が要求される」という奇妙な混合体の関係が現れている。Banfieldは'*amoral familism*'の表れとして指摘しているが、自身の利益になるときだけ、行政サービス、公共の問題、投票に積極的にかかわったり、公平なサービスを提供すべき者が私利に走ったりするといった行動には、これまでとは異なる関係性が認められる［Banfield 1958；85-104］。公共性の高い領域に顕著な関係性であるというのは示唆的である。

この結合体の関係とは、これまでの「上流層」との関係が変化したもの（変

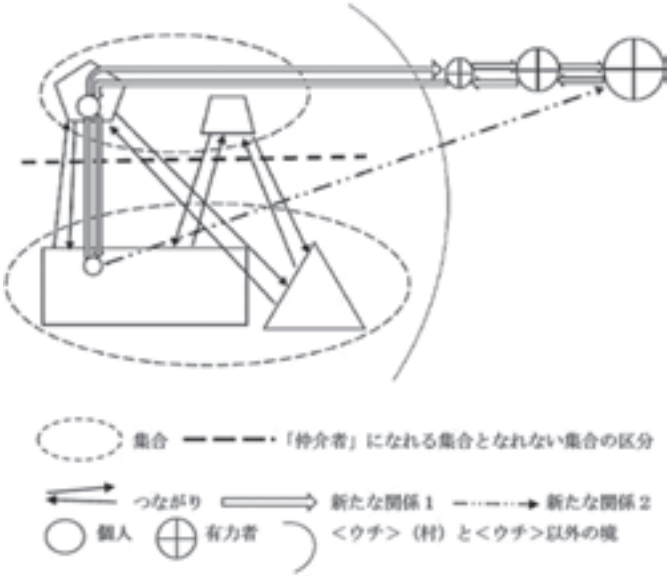

図2　つながりの重なりと新たな関係

化せざるを得なかった)、対面的な二者関係が三者関係となり、非・対面的な二者関係が付随する形である（図2)。パーソナルな対面的な二者関係のつながりの＜外＞に必要なものがある場合、財力や地位のある者しかアクセスできないため､「上流層」の力を利用するしか方法はない。ここで「上流層」は＜外＞（最終目的の相手）との「仲立ち」「仲介者」となり、二者関係が三者関係になる。首尾よく「上流層」の二者関係を利用する形で、最終目的の相手までたどりつき、必要なものを手にしたとしても、そこで終りではなく、その相手からの要求がくるのである。つまり、直接頼みごとをしていない相手の一方的な頼みごとが、対面的な二者関係に埋め込まれてしまったのである。これは、制御からも体系化からも逃れていた（放置されていた)、全体を統御するものの不在状況にあった周縁地域の変化ではないだろうか。「搾取／依存の垂直的関係」［Putnam 1993；148］の形態、機能、意味の変化ではなく、質の変化として捉えねばならないが、その問題は稿を改めて論じたい。

社会の変革を目指すBanfieldには、こうした二者関係のつながりの連鎖は、退行現象あるいは現状維持（停滞）にしか見えないだろう。モンテグラーノの人びとはアソシエーションとは別の形で、対面的なつながりを組み合せながら＜外＞に接続していたのだが、それは常に具体的な状況に左右された、一時的、流動的な関係づけであったため、Banfieldの目指す連帯とはほど遠いものであった。

5．おわりに

いかなる状況においても、なぜ、アソシエーションが最適なのかという問いは、はじめからBanfieldにはなかった。どうやったらうまくゆくのか、どうしたらましになるのか、アソシエーションは常に受容されるべきものだと考えていたからである。ゆえに、モンテグラーノの人びとが、自分たちの生活改善や公益のために協同したり、家族の即自的・物質的利益を超えた目的

のために連帯したりしないのは、'*amoral familism*'に侵されているからではなく、ただ単に「そうした」状況では、何の利益も結果ももたらさないことを知っているからだとは、考えもしなかった。また、アソシエーションのような水平的連帯を発達させるのとは別のやりかたで、急速な近代化による「ひずみ」を解決しているモンテグラーノの動態も見えなかった。パーソナルな対面的なつながりはすべて、'*amoral familism*'に回収しているため、二者関係を規定する原理の適応範囲＝＜ウチ＞のなかの多様なつながりを捉えそこねているだけでなく、＜ウチ＞と＜非・ウチ＞の接続によって仲介者を介した新たなつながりの出現をも見逃してしまっている。Banfieldは対象に密着した論を展開しているようで、実はそうではないことがわかるだろう。

Banfieldが問わねばならなかったのは、なぜ、モンテグラーノは近代化が遅れているのかではない。また、その遅れを説明するために'*amoral familism*'という文化的決定因子を仕立てあげることでもない。問うべきは、なぜ、モンテグラーノでは急速な近代化が、アソシエーションの欠如という形で現れたのかではないだろうか。かたちのない共同性のありかたを徹底的に形式化する、その視点と方法が問われねばならない。ローカルなものは、たやすく二項対立の図式に絡めとられてしまうからである。

［注］

1） Banfield, Edward C.（1916-1999）；1930年代、アメリカの農務省やFSA（農業安定局）プロジェクトの仕事に携わったが、政府の農村救済策の効果に疑問を持つようになり、離反してシカゴで研究を続けた。政策の失敗を確信したのは、アリゾナ州のカサグランデの農場で調査したときであった。農民たちは協同的な態度をしめすどころか、失った地位をもとめてお互いに激しく対立、外部とも闘争するようになっていたからである。Banfieldはすぐにユタ州のガンロックで、辺境の遅れた土地の貧しい農民の調査をはじめる。彼の意図は、政府の援助がない、この地の農民はカサグランデの貧農よりも、協同するかどうかを見ることにあった。アソシエーションへの着目はここから始まった。

2） イタリア語初版は*Una Comunità del Mezzogiorno*『南部のコミュニティ』と題して、1961年に出されたが、それほど注目されることはなかった。しかし、

1976年 *Le Basi Morali di una Società Arretrata*『遅れた社会の道徳的基盤』に改題されて出版されると、大きな反響を呼んだ。それ以降、再版されるたびに批判の的になる著作である。イタリアの社会学者や人類学者の反応は'70年代から一気に高まり、第4版が刊行された2010年まで、'*amoral familism*'をめぐって果てしない論争が続いている。Banfieldは自説の立証のため、南イタリアの農村調査を行ったと、そのエスノセントリズムを非難されたが、それは当時のアメリカの研究者たちの態度に共通するものであった［Marselli 1963］。つまり、南イタリアはアメリカの都市や移民の貧困問題を考えるための「材料」でしかなかったのである。Pizzornoは、一事例研究から後進性の社会モデルへの飛躍が一番の問題だと指摘している。Colombisは「予言の自己成就」に過ぎないと一蹴し、家族の＜外＞に対する閉鎖性と利己的関係の強調は、社会的結合の源泉となる家族を見えなくすると述べ、新たな概念'*famiglianza*'「家族的同盟」を提示する。筆者が興味深く思うことは一つである。'*amoral familism*'は「発明」されたものだが、'*familism*'の存在そのものは否定していないことである。

3） Banfieldは「モンテグラーノ」という仮称の地名を用いているが、バジリカータに実在する土地である。

4） Fukuyama, Francis（1952-）；家族の絆がほかの社会的絆よりも強い傾向があり、国家と個人の間にある社会的中間団体が組織されにくいという特徴は、イタリア南部のものだと述べている。似たような傾向は中国系社会にも見られると言う［1995 Italian Confucianism］。

Putnam, Robert D.（1940-）；Banfieldの'*amoral familism*'をさらに発展させ、「市民コミュニティ」という概念をつくってイタリア全体（州単位）を分析した。南部は完全に「市民コミュニティ」が欠落しており、'*amoral familism*'は消滅する気配がないと述べている［1993 *Making democracy work*］。

5） モンテグラーノでは「農民」という言葉は、二つの意味で用いられる。ひとつは、土地を耕す者、もう一つは、土地を所有する者（耕作もする）の意味である。

［参考文献］

Bagnasco, Arnaldo (2006) Ritorno a Montegrano, *Le Basi Morali di una Società Arretrata, Banfield*, Edward, Il Mulino, pp.7-34.

Banfield, Edward C. (1958) *The Moral Basis of a Backward Society*, Free Press.

Bronzini, Givanni B. (1982) *Cultura Contadina e Idea Meridionalistica*, Dedalo.

Cancian, Frank (1961) Southern Italian peasant: world view and political behaviour, *Anthropological Quarterly* 34, pp.1-18.

Cesare, Paolo (ed.), (1992) *Dopo il familismo cosa?- Tesi a confronto sulla questione meridionale negli anni 90*, Franco Angeli.

Colombis, Alessio (1997) Invece del familismo: la famiglianza, *Famiglia Meridionale Senza Familismo*, Meloni, Benedetto (ed.), Meridiana, pp.382-408.

Eric, Wolf (1966) Kinship, Friendship, and Patron-Client Relations in Complex Societies, *The Social Anthropology of Complex Societies*, M. Banton (ed.), Tavistock, pp.1-22.

Eisenstadt, Stephen&Roniger, Luis (1984) The Basic Characteristics and Variety of Patron-Client relations, *Patrons, Clients and Friends: Interpersonal Relations and the Structure of Trust in Society*, Cambridge, pp.43-80.

Ferragina, Emanuele (2009) The never-ending debate about the moral basis of a backward society, *Journal of the Anthropological Society of Oxford*, 2, pp.1-20.

Foster, George M. (1965) Peasant Society and the Image of Limited Good, *American Anthropologist*, 67, pp.293-315.

Fukuyama, Francis (1995) Italian Confucianism, *Trust: the social virtues and the creation of prosperity*, the Free Press, pp.97-145.

Gribaudi, Gabriella (1993) Familismo e famiglia a Napoli e nel Mezzogiorno, *Meridiana* 17, pp.9-42.

Ginsborg, Paul (1998) Socieà civile e cultura di massa, *L'Italia del tempo presente: famiglia, società civile, stato 1980-1996*, Einaudi, pp.185-207.

Kertzer, David (2007) Banfield, i suoi critici e la cultura, *Contemporanea*, 10(4), pp.701-709.

Marselli, Gilberto, A. (1963) American sociologists and Italian peasant society: with Reference to the Book of Banfield, *Sociologia Ruralis* 3, pp.319-338.

Miller, Roy A. (1974) Are Familists Amoral? A Test of Banfield's Amoral Familism Hypothesis in a South Italian Village, *American Ethnologist* 1(3), pp.515-535.

Moss, Leonard&Capannari, Stephen (1960) Patterns of kinship, comparaggio and community in a Southern Italian village, *Anthropological Quarterly* 33, pp.24-32.

Pinna, Luca (2010[1971]) *La famiglia esclusiva: parentela e clientelismo in Sardegna*, Ilisso.

Pizzorno, Alessandro (1966) Amoral familism and historical marginality, *International Review of Community Development* 15, pp.55-66.

Putnam, Robert (1993) *Making democracy work*, Princeton University Press.

Schneider, Jane (ed.) (1998) *Italy's "Southern Question": Orientalism in One Country*, Berg.

Silverman, Sydel (1968) Agricultural organisation, social structure and values in Italy:

amoral familism reconsidered, *American Anthropologist* 70/1, pp.1-20.
Wichers, Anton J. (1964) Amoral familism reconsidered, *Sociologia Ruralis* 4/2, pp.168-181.
宇田川妙子（1987）「famigliaとfurberia：南イタリア村落社会の非集団的分析の試み」民族学研究 51 巻 1 号、pp.50-72.
小田亮（1996）「しなやかな野生の知―構造主義と非同一性の思考」『思想化される周辺世界』岩波講座文化人類学第 12 巻、pp.97-128.
トクヴィル（2008）『アメリカのデモクラシー』第 2 巻（上）松本礼二訳、岩波文庫.
モース，マルセル（2008）『贈与論』有地亨訳、勁草書房.

（文学研究科准教授）

SUMMARY

‘Mezzogiorno’ and *amoral familism*

Yasuko Imoto

keywords : ‘Mezzogiornno’ / amoral familism / dynamics of relationships

From the 1950s through the 1960s, a geographical category existed in Italy whose name and reputation seemed to connote almost a climate antithetical to modernization. This was Mezzogiorno—an area best known for having led the American political scientist Edward C. Banfield to coin the term ‘*amoral familism*’ (*The Moral Basis of a Backward Society*, 1958). Yet, the primary focus of this article is not simply the ‘creation’ of this geographical category and its isolation due to a reputation for ‘backwardness’ but the clarification of a “silent social solidarity” and its concomitant “logic of familial ties” expressed in the dynamics of various relationships that could be immediately drawn on according to circumstances to ensure the survival of the regions’ inhabitants. In this paper, I reconsider the Banfield’s’ concept of the ‘*amoral familism*’. In doing so, I demonstrate how such a concept appears to be little more than the vestiges of a prior age in terms of the spirit of modernization and actually uses strategies incorporating heterogeneous elements while working to adjust mutual relations to maintain equilibrium and immediate satisfaction as much as possible.